

# だんじり祭り

熊取町 五門 鈴木 純さん

だんじり祭りとは、だんじりと呼ばれる山車や太鼓台などを用いた祭礼のことで、夏から秋にかけて各地域において疫病退散や五穀豊穰などを祈願する祭です。熊取での祭の始まりは定かではありませんが、1800年代には行われていたとの記録が残っております。ここ泉州地域では、毎年9月中旬に岸和田だんじり祭が行われ、その後、10月中旬頃にその周辺の地域で、だんじり祭りが行われます。祭りでは、各町内(地区)にある地車(だんじり)を、子どもから大人まで、揃いの法被(はっぴ)姿で曳き回します。笛や太鼓の「だんじりばやし」が鳴り響くなか、地車(だんじり)の屋根の上では、大工方が飛び跳ねるなど勇壮なだんじり曳行が楽しめます。熊取町では、五穀豊穰を祈願し感謝する祭で、総社である大森神社の例祭でもあり、毎年10月の第2月曜日直前の土曜日に開催されます。

- ・両日とも午前中は、町内の各地区で地車(だんじり)を曳行し、
- ・土曜日は13時より大森神社の宮入で主に大森神社周辺、
- ・日曜日は13時より駅前パレードで熊取駅周辺を曳行します。

また夜には地車(だんじり)を提灯で飾り、ゆっくりと練り歩く灯入れ曳行が行われます。

<注> 大工方:地車(だんじり)の屋根に乗り、進路の指揮をとります。  
また、団扇(うちわ)を持って優雅に踊るその様は、見る人々を魅了して止みません。



五門地区の祭礼団体の皆さんと



## 地車(だんじり)

熊取町の地車は「岸和田型地車」もしくは「下地車」と呼ばれ、担い棒(かたせ)の無い地車です。高さ3.6メートル以上、重さ4トン前後のもので、主として櫂(けやき)が使われているほか、紫檀や黒檀、さらには貴重な黒柿などを使用するものもあります。地車の周囲は緻密な彫刻で埋め尽くされており、日本の神話伝説や源平盛衰記・太平記・太閤記などを題材にした彫刻が施されています。また、地車の内部には大太鼓・小太鼓・鉦が積み込まれています。

熊取町では、11の地区(宮入順)に、  
 朝代・和田・大久保・紺屋・五門・野田・七山・小谷・久保・小垣内・大宮  
 地車(だんじり)があり、製作年順に、  
 明治時代:野田  
 大正時代:大久保・紺屋・五門・七山・朝代・和田  
 昭和時代:大宮・久保  
 平成時代:小垣内・小谷  
 と、各時代ごとの大工の細工や彫刻の意匠の変遷を見ることができます。

熊取町交流センター「煉瓦館」で常設展示している先代の小垣内地車は、1880(明治13)年製作のもので熊取町の最古の地車です。  
 そして、平成期の小垣内(平成22年)、小谷(平成26年)の地車は、本体のみ(装飾品・太鼓等は別)の製作に1億円を超える費用がかかっております。



小谷地区の地車



地車後部の見送り周りの彫物

<注> 地車彫刻の一番の見所  
 地車彫刻には数名の彫刻師の手が入ります。  
 なかでも、この正面土呂幕部分は、彫刻棟梁が自ら手がける部分で、一番の注目ポイントになります。



地車の正面土呂幕の彫物  
 『根来戦記 千石堀城の戦い 大谷左大仁の奮戦』

(画像左『筒井順慶』)

(画像右『大谷左大仁(小谷ゆかりの人物)』)



<注>  
 千石堀城の戦い 1585(天正13)年  
 豊臣軍と根来衆(千石堀城:貝塚市)の攻城戦  
 豊臣軍の勝利、千石堀城は落城

## 曳行

地車(だんじり)は、前方に50～100mほどの2本の曳き綱をつけ、200人程度で曳行します。

### 遣り回し(やりまわし)

だんじり祭りの見どころはやはり「遣り回し」です。曳行コースの曲がり角を、いかに早く、美しい曲り方が出来るか。各地区のこだわりがそこにあります。

<注> 泉州地域の方言で、「やって(走って行って)回す」が語源とされています。



### 試験曳き

祭りの1週間前の日曜日に行われる試験曳きは、前年の祭からほぼ一年振りに曳行するにあたり、それぞれの持ち場の役割や動きの確認のために行われます。午後から夕方までの曳行ですが、見物人も少なく比較的に見やすいと思います。

### 曳き出し

本曳きの初日、朝6時より各地区を一齐に動き出します。これを『曳き出し』呼び、熊取では大きく分けて大森神社周辺地区の『上地区』と、駅前周辺地区の『下地区』に分かれて曳行しています。2日間の祭の始まりということで、各地区の力の入った遣り回しを見ることができます。

### 宮入

本曳き初日午後、13時より宮入が始まります。熊取町の宮入順は大森神社から遠方の地区順から宮入りする習わしで、見どころはやはり『オクノ衣料店前』の遣り回しと、大森神社境内の舞台を勢いよく廻る熊取だんじり祭り独特の宮入です。だんじりファンの人気が高い見物スポットです。



(左) 大森神社の宮入

(中) 大森神社で宮入を終えて待機する地車

(右) オクノ衣料店前の遣り回し

## 駅前パレード

本曳き二日目の13時よりパレード開始。全11地区の地車が駅周辺の周回コースに集結。パレード順に従って熊取駅前ロータリーにて各地区工夫を凝らした催しを行います。周回コース内であれば全地区が途切れることなく見られ、大勢の見物人が訪れます。



大勢の見物人と、各地区の工夫を凝らした催し

## 灯入れ曳行

駒提灯と呼ばれる朱色の提灯で地車(だんじり)を飾りたて、明かりを灯し、ゆったりとした速さで練り歩きます。昼間とは違った幻想的なもう一つの祭の顔です。



## 祭礼団体組織

だんじり祭りは曳行の計画・実施以外にも、交通誘導・観客整理・警備など、すべて自主運営が基本となっています。

そのため、各地区ごとに年齢・世代に応じて持ち場が決められ、祭礼団体が組織されています。

子供会(小学生): 曳き綱の前方を担当

少年団(中学生): 曳き綱の中ほどを担当

青年団(高校生~): 曳き綱の最も地車(だんじり)に近いところを担当

人組(20才代後半~): 地車(だんじり)後方の後艇子と呼ばれる舵棒や大工方を担当  
(丸の中には数字が入り、十五人組や参拾人組などと呼ばれます)

若頭(40代~): 地車(だんじり)周辺の安全確保や前艇子と呼ばれるブレーキを担当

世話人(50代~): 曳行コース内外の交通整理誘導や祭礼運営のご意見番の役割。

曳行責任者はこの世代より選出します。

<注> 若頭、世話人という名称を使わず、「年番」という名称を使う地区もあります。

また、熊取町年番(各地区の区長・曳行責任者・若頭や世話人からの選出メンバー)、および、青年団の代表者で構成される熊取地車祭礼運営委員会があり、特に熊取町年番は祭の一切を取り仕切る役割があります。



祭礼委員会、祭礼警備、曳行責任者等の皆さん

## 祭までの1年間

祭礼は10月の2日間ですが、実は、1年間に亘ってその準備をしています。

10月(第2月曜日): その年の祭の翌日、筋肉痛の足を引きずりながらゴミ掃除。

地車(だんじり)も飾り付けを外し、汚れを拭き取り、破損個所の確認などをしてシートでくるみ、地車庫(だんじり小屋)に収めます。

そして反省会。ビデオを見ながら失敗した遣り回しを何度も何度も繰り返し見て来年に向けての課題を洗い出します。

11月: 祭にかかった費用などの報告や、来年の各責任者への引き継ぎ。これらは大体11月位までに終わります。

4月: 各地区の新体制が揃い終えた4月頃から区長会代表・町年番長・青年団代表が、警察をはじめバス会社など、祭に協力していただいている企業や団体への挨拶回りがあります。

5~7月: かつては祭前でないと開かなかった地車庫(だんじり小屋)も、最近では子供たちに関心を持ってもらうということで「地車ふれあいイベント」等を催すところも増えてきました。

8月: お盆過ぎくらいから、祭の「御花(寄付金)寄せ」が始まります。

警察への曳行コース説明や曳行許可申請なども始まります。

9月：献灯台の設置、祭礼団体の会議や遣り回しの練習等の寄り合いが連日行われます。  
夕方には子供たちが地車庫(だんじり小屋)に集まり、青年団の鳴物係に交じて太鼓を叩いたり、地車(だんじり)の屋根で踊ったりします。  
岸和田のだんじり祭(9月中頃)が終わると、いよいよ自分達の番と言わんばかりに、詰所の設置や曳行コースに紅白幕など飾り付けたりと、町中が一気に祭りモードに包まれます。  
10月(第1日曜日)：試験曳き。納得のいかなかった部分は本曳きまでに練習で修正します。  
10月(第2土日曜日)：いよいよ本曳き。大森神社で安全祈願のお祓いを受け、いざ。  
ここからの二日間は夢を見ているかのように「あっという間」に過ぎ去ってしまいます。  
そしてまた一年が経ちます



熊取駅と近隣の献灯台

## ご見学にお越しになる皆様へ

祭礼期間中は交通規制を始め、何かとご迷惑をお掛け致しますが、ご協力の程宜しくお願い致します。  
特に、熊取だんじり祭は自主警備を基本としておりますので、プロの警備員とは違い、言葉遣いなど至らぬ点も多いかと思えます。見物の皆様ならびに祭礼関係者の安全確保のため、警備関係者の指示には従って頂きますよう宜しくお願い致します。

